

おふでさきの世界を歩く

第 11 回

山澤昭造

【やまざわ しょうぞう】
本部准員
天理教校本科研究課程主任

三号を読むにあたって

〈「おふでさき」における暦について〉

第三号の表紙には、「明治七戌年一月ヨリ」とあります。第一号の表紙には「明治貳巳年正月從」と記されていました。「一月」と「正月」は、同じ月を表す表現ですが、少し意味が異なります。

明治五（一八七二）年十一月九日、明治政府はこれまでの太陰太陽暦（旧暦）をやめ、太陽暦（新暦）を採用すると発表しました。その際に、太陽暦の新年に合わせ、明治五年十二月三日を明治六年一月一日と

し、この改暦を実施する旨を定めました。この改暦以後、それまで年の最初の月を「正月」と呼んでいたものを、「一月」と呼ぶようになったのです。つまり、「正月」が旧暦の呼称であるのに対し、「一月」は新暦の呼称になります（※1）。明治五年以前には「一月」という言い方はなかったということになります。

「おふでさき」第一号および第二号と、第三号との間で、暦が太陰太陽暦から太陽暦に切り替わってい



るのです。

暦が変わったとはいえ、長年慣れ親しんできた旧暦に基づく生活習慣は、日本人の季節感と合致しており、簡単に切り替えられるものではありませんでした。地方によっては、第二次世界大戦後まで旧暦に合わせた生活をしていた地域もあったようです。新暦が完全に定着するには、数十年単位の時間を要したのです。

そのようななかで、改暦から間もない明治七年の時点で、太陽暦が早くも用いられているということに注目すべき点です。「おふでさき」表紙の大部分は、秀司^{しゅうじ}様が記されたものです。秀司様は、明治六年五月二十六日に庄屋敷^{しやうやしき}村戸長となり、同年十二月には庄屋敷村検証役に任命されています。地方の公的な立場を担っておられたからこそ、太陽暦についても、いち早く導入しようとしたのではないのでしょうか。

以後、年月日に関して、「おふでさき」表紙は太陽暦で記されるようになります。ただし、本文については、太陰太陽暦で一貫して記されています。したがって、本文の日付は太陰太陽暦になります(※

2)。教祖は、旧暦に基づいて生活をされていたのです。

なお、「明治七戌年一月」は、旧暦の明治六年十一月十三日から十二月十四日までとなります。表紙は、その号のお歌がすべて詠^よまれたあとに心覚えとして記されたと推測され(※3)、第三号のお歌は、旧暦の明治六年から執筆されたこととなります(次ページにコラム)。

〈「おふでさき」の外冊について〉

ここで、「おふでさき」の外冊^{げさつ}についても、ふれたいと思います。「おふでさき」には、正冊と呼ばれるものと外冊と呼ばれるものがあります。

正冊というのは、「おやしき」(天理教教会本部)に保管されてきた、教祖の筆になる十七号千七百十一首の「おふでさき」を指します。現在刊行されている『おふでさき』の原本です。

それに対して、「おやしき」に保管されている十七号の「おふでさき」以外に、教祖直筆のお歌があります。これを外冊と呼んでいます。外冊の「外」は、「おやしき」の外を意味します。



明治七年六月十八日（陰曆五月五日）、教祖は、三味田の前川家にかぐら面をお迎えに行かれます。そのとき、「おふでさき」二冊（第三号および第四号）と虫札十枚とお札の印にと差し出されます。その「おふでさき」（第四号）の表紙に前川家のほうで、「外冊、神様直筆、七十七歳書」と記されました。

た。これが外冊という言葉の由来になります。つまり、「おやしき」で保管される原本に対して、たとえ教祖の直筆のお歌であっても、いったん分け与えられたものは外冊として、教祖の手元にとめおかれたもの（正冊）と明確に区別して扱われたのです。

第三号執筆の時期

「おふでさき」第三号の外冊をみると、三号のお歌の右肩に「十月三日」と日付が記されている。このことについて、中山正善『外冊「おふでさき」の研究』（道友社、昭和43年）は、次のように記している。

外冊の「十月三日」を、明治六年旧十月三日と考へると、これは太陽曆では十一月二十一日に相当する。
されば年末のものも、新年度のものに添附されて一冊子と綴込み、新年度の年月日を記入されたものと推定す。

（784ページ）

また、諸井政一「道すがら外編」は、「おふでさき」の執筆時期について、次のように記している。

……明治二年の三月までに、一冊できまして、三月から又一冊できました。（略）
それから、明治六年までは、御筆がござりませずして、六年の八月ごろから、またく御筆をおとりあそばされまして、だんく御かきつけ被下しましたのが、明治十四年の末までに、十五冊できました。

（『正文遺韻抄』道友社、昭和45年、70―71ページ）



この前川家の深慮を酌み、教祖のお手元以外に他に与えられた教祖直筆のお歌を「外冊」と呼び、そのまま手元に保管され今日に及んでいる十七号千七百十一首の「おふでさき」を「正冊」と呼んで区別するようになったのです。

外冊は、便宜上、保管者の名前を冠して、「外冊〇〇本」(たとえば「外冊中山本」「外冊前川本」など)と称されます。十七号の「おふでさき」のうち、外冊が発見される号もあれば、発見されない号(二、六、十、十一、十三(※4)、十六の各号)もあります。また、重複して発見される号もあるようです。千七百十一首のお歌の約半分弱に当たる、八百二十首のお歌に外冊が存在するそうです。

なお、外冊には、正冊十七号のお歌の中にはないお歌が存在します。これらは特別に「おふでさき号外」と呼ばれます(23ページにコラム)。

〈外冊の意義①〉——読み方の特定——

「おふでさき」に外冊が存在していることには大きな意味があります。外冊の意義はいくつかありますが、ここでは、二点だけ指摘したいと思います。

まず一つは、お歌の読み方を明らかにするのに役立つという点です。正冊と外冊では、同じお歌であっても表記が異なる場合があります、それらを比較することで、読み方と意味が確定されることがあります。たとえば、三号29のお歌は、正冊では次のように記されています。

子のよなきをもふ心ハちがうでな

こがなくでな神のくときや (三 29)

この表記ですと、「子が泣くでなあ」という読み方も可能になります。しかし、外冊をたずねると、

子のよなきをもふ心ハちがうでな

こがなくでない神のくときや (三 29)

と記されています(傍点は筆者)。これにより、この箇所は「子が泣くでなあ」ではなく、「子が泣くでない」と読むのだということが特定されることとなります。

〈外冊の意義②〉——執筆時期の特定——

外冊の意義の、もう一つは、「おふでさき」の執筆時期の特定に役立つという点です。「おふでさき」正冊の第十二号を見ると、初めのほうに「十二月廿

七日より」「三月十四日より」などと日付が記入されています。外冊には、正冊にはない箇所にも、このような日付が記入されているのです。日付は、執筆時期を表すものと考えられます。

たとえば、「おふでさき」第三号では、1―47のお歌に外冊が存在していますが、外冊には、正冊にはない日付が次のように書き込まれています。(括弧の数字は、そのお歌の右肩に日付が記されているということの意味します)

十月三日(※5)

(5)のお歌(以下、同)

十日

(7)

十二日

(15)

十五日

(19)

十六日

(28)

十八日

(42)

これらの日付を見ると、教祖がどのくらいのペースでお歌を執筆されたのかということも、よく分かります。さらに、これらの日付は、お歌同士を区切って、段落を見つけるうえでも、非常に役立ちます。先ほど述べましたが、教祖が記された「おふでさき」本文の日付はすべて旧暦です。第三号が旧暦の明治六年に記されたことを踏まえると、第三号の初めのところは、明治六年陰暦十月に詠まれたお歌であるということが分かるかと思えます。

中山正善・二代真柱様は、こうした日付が元来、

「おふでさき」の全号にあつたかは推測できたいが、日付が外冊に割合多いところから見て、もともと最初の段階では記入されていたものが、浄書されるときに、失われたものではないかと推察されます(※6)。外冊を浄書したものが正冊ではないかと考えられていたのではないのでしょうか(※7)。

外冊について、詳しく学びたい方は、

中山正善『外冊「おふでさき」の研究』(道友社、

昭和43年)

という本を、ぜひお読みいただきたいと思えます。

〈「おふでさき」執筆の空白期間について〉

第三号の本文は明治六年に執筆を開始されたのではないかと述べましたが、表紙の日付のうえで、第二号と第三号との間には、約五年の空白期間があることとなります。

おふでさき号外

「おふでさき号外」の一例として、「山村御殿のふし」の翌朝、明治7年12月24日（陰暦11月16日）朝、教祖は、

にちく／＼に心つくしたものだねを

神がたしかにうけとりている

しんぢつに神のうけとるものだねわ

いつになりてもくさるめわなし

たんく／＼とこのものだねがはへたなら

これまつだいのこふきなるそや

（おふでさき号外）

（『稿本天理教教祖伝』120―121ページ）

と、詠まれた。

ほかの号外のお歌については、『外冊「おふでさき」の研究』を参照のこと。

これについては、次のような考え方が成り立ちます。

（ア）この間、教祖は「おふでさき」を記されなかった。

（イ）記されたが、警察に没収されたか、あるいは紛失してしまったため、その間のものが残っていない。

（ウ）第二号のお歌は、明治二年から複数年にわたって執筆された。

この空白期間について、二代真柱様は、この間、教祖はお筆を運ばれなかったのではないかと推察されています。

すなわち、もしも、紛失したために現存していないとするなら、表紙に十七号までの号数がきれいにそろって記されているのはおかしくなります。それに、第二号と第三号のお歌を比較対照してみたときに、語調やお歌の内容のうえで大きな変化があるわけでもありません。そして、第二号の執筆に時間を費やされたことがあったとしても、何年もかけられたということは考えにくいことです。立教直後に、教祖は三年間、内蔵にこもられたと伝えられますが、

そうした時間を持たれたのではないか。お歌を読む人々が成人するのを待つておられたのではないか。

このようにお考えを述べておられます(※8)。

このことを踏まえて、次に明治二年から六年までの道の動きを振り返りたいと思います。

〈明治二年から六年までの道の動き①〉

明治二年に、教祖は、「世界たすけの前提として屋敷の掃除を急せき込まれ」(『教祖伝』105ページ)、「おやしき」の人々や信者の人々(「うち」の者)の心を澄ますところから取りかかられました。

そして、魂の「いんねん」ある小東こひがしまつゑ様を、秀司様との結婚を通して、「おやしき」へと引き寄せ、もらい受けられたのです。

「おやしき」の中が掃除され、「いんねん」ある方が「おやしき」に引き寄せられるなど、「おやしき」の中が次第に、教祖のお望みくださる姿に近づいたのを見定められたうえでのことでしょうか。教祖は、翌三年に、「おふでさき」第一号1—8のお歌を少し整えられたうえで、これを「よろづよ八首」として「十二下り」のお歌の初めに加えられました。同

年には、さらに「ちよとはなし」の歌と手振りを教えられました。

明治三年は、慶応三(一八六七)年から満三年になります。教祖は「十二下り」の「節付けと振か付けに、満三ケ年かかられた」(『教祖伝』95ページ)とありますが、この年は、節付けと振り付けが完成した年でもあります。

「よろづよ八首」の意味については、連載の第3回(本誌立教188年7月号、48ページ)においてふれましたので、ここでは「ちよとはなし」について述べたいと思います。

「よろづよ八首」が、「十二下りのだし」とお聞かせいただくのに対して、「ちよとはなし」は「かんろだいづとめのだし」であると教えられます(※9)。「ちよとはなし」は、「元初もとはじめりの話」のエッセンスを示すお歌と手振りであり、「元初もとはじめりの話」を凝縮させたものではないかと思案します。「かんろだいの「おつとめ」を勤める前には、「ちよとはなし」を勤めるようにと教えられるのです。

「かんろだいの「おつとめ」を本格的に教え始められたのは、この先のことになります。それに先

立って明治三年にその「だし」である「ちよとはなし」を教えた。「元初りの話」のエッセンスを凝縮した「おつとめ」を唱え踊るようにされたのです。

教祖が「元初りの話」を本格的に説いて聞かせてくださったようになったのは、明治十三、四年ごろのことだと想像しますが、すでにこの時点で、大まかな輪郭のところは教えておられたのではないでしょうか。

人々の成人に応じて少しずつ「おつとめ」の全貌を整えてくださったのです。

〈明治二年から六年までの道の動き②〉

明治三年に「十二下り」の節付けと手振りが完成し、「よろづよ八首」と「ちよとはなし」を教えられたことと呼応するかのよう、道はどんどん伸び広がりました。親神様が勇んでお働きくださったのでしよう。その様子を、『教祖伝』は次のように記しています。

明治三年、四年、五年と、珍しいたすけは次々に現われ、親神の思召は大和の国境を越えて、

河内、摂津、山城、伊賀と、近隣の国々へ弘ま
った。
(107ページ)

お道は、大和の国を越えて、近畿圏内に次々と広がっていききました。その具体的な表れとして、『教祖伝』には、「明治四年正月には、河内国の松村栄治郎が、信仰し始めた」(108ページ)ことと、明治五年に七十五日の断食の最中、教祖が若井村(現在の奈良県平群町若井)の松尾市兵衛宅へ歩いて「おたすけ」に赴かれたことの二つが記されています。

このときの「おたすけ」の様子については、『逸話篇』に詳しく紹介されています。それを讀むと、これらの方々が将来「よふぼく」として、さらには「おつとめ」の人衆として勤めることができるよう、教祖が「ひながたの親」として御自ら仕込まれる様子うかがいがい知ることができます。

「おふでさき」には、二つの柱があり、その一つは、「せかい」に向かつての布教伝道であると述べたことがあります(連載第2回、本誌立教188年5月号、48-49ページ)。「よふぼく」となる人を「おやしき」へ寄せ、教理を仕込んだうえで、布教伝道に出そうとされて

いるのです。その具体的な場面を、『逸話篇』から学ぶことができるのです。

〈明治六年に「かんろだい」の模型を製作〉

このようにして、「おつとめ」が教示され、道が伸び広がるなか、教祖は、明治六年に、大工である飯降伊蔵いぶりいぞうに命じて、「かんろだい」の雛型ひながた（模型）を作られました。その模型は、「高さ約六尺、直径約三寸の六角の棒の上下に、直径約一尺二寸、厚さ約三寸の六角の板の付いたもの」（『教祖伝』109ページ）で、実際の「かんろだい」を簡素化したような形になります。

「かんろだい」については、明治二年に記された「おふでさき」第二号39に、すでに見られます。明治二年の段階で「かんろだい」というものをこれから建てるということは教えてくださっていたのです。おそばの人々にしてみたら、話に聞くだけでは、「かんろだい」がどういうものであるか想像もつきません。そこで、明治六年に、模型を作り、「かんろだい」とはこのようなものであるということを、目に見える形で明らかにされたのではないのでしょうか。

人々にしてみたら、「かんろだいとはこういうものか」と思われたでしょうし、「かんろだい」を囲んで「おつとめ」を勤めるということが一氣に現実のものとなってきたのではないのでしょうか。

この模型は、旬が来るまで倉に納められ、明治八年に「ちば定め」が行われ、同年こかん様の身上お願いづとめに当たり、初めて元の「ちば」に据えられることになりました。教祖は、人々の心が成人するまでお待ちくださったのです。

なお、このころの「おやしき」の様子について一つだけ付け加えておくと、明治五年六月十八日に、梶本かじもとおはる様が四十二歳で出直されます。あとに残された子供は、眞しん之亮のすけ様は、はじめ三男二女がおられ、生まれて間もない乳飲み子もいました。そうした状

※1 曆については、岡

田芳朗他編『曆の大事典』

（朝倉書店、2014年）

に詳しい。

※2 「おふでさき」に

おける陰曆と陽曆をめぐ

況を見るに見かねて、こかん様が、「おやしき」から梶本家へ行かれることになったのも、このころのことです。

以上が明治二年から六年までの道の動きのあらましです。「おつとめ」の段取りのうえでも、布教伝道のうえでも、明治七年から道は大きく動き始めることになります。それに先立って、教祖が人々の成人に応じて少しずつ道を進めておられる様子をうかがい知ることができません。

こうしたなかで、教祖は再び「おふでさき」の筆を執られることになったのです。

おふでさき
の世界
を歩く



る問題については、澤井

勇「陰曆から陽曆へ」

『おふでさき』第三号一

一〇註をめぐって」(『ビ

ブリア』第92号、平成元

年)を参照されたい。

※3 「おふでさき」の

表紙と本文をめぐる問題

については、上原道延「お

ふでさきにおける表紙の

日付——特に第三号から

第五号をめぐって」(『天

理教校論叢』第42号、平

成24年)を参照されたい。

※4 十三号には「疑冊」

と呼ばれるものがある。

「疑冊」とは、保管者が

真筆と伝えているもので、

事實は疑わしいと思うも

のを呼ぶ。(中山正善「外

965ページ参照)

※5 ただし、外冊の写

真版を見ると、「月／十

三日」と記されているよ

うにも読むことができる。

(外冊「おふでさき」の

研究』956ページ参照)

※6 「外冊「おふでさ

き」の研究』787ページ参

照。

※7 前掲、上原道延「お

ふでさきにおける表紙の

日付——特に第三号から

第五号をめぐって」参照。

※8 中山正善「おふで

さき概説」道友社、昭和

40年、21、44—45ページ

参照。

※9 「正文遺韻抄」道

友社、昭和45年、74ページ参照。